

Title	野性ニホンザルにおける重度奇形個体の行動発達的研究 (III 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	小山, 高正; 中道, 正之
Citation	霊長類研究所年報 (1981), 11: 42-42
Issue Date	1981-12-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/162984">http://hdl.handle.net/2433/162984</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

抗争的とはなり得ない物理的、社会的力量の差を投影したりしつつ、より完成された社会行動を身につけ、他個体とより適切にコミュニケーションできるように成長していくのであると考えられる。

#### Two-frontal behavior の発達に関する研究

渡辺 邦夫 (京大・霊長研)

霊長類の多くの種において、一方で第三者に対してある特徴的な非攻撃的な行動をとりながら、別の個体を攻撃するという行動がみられる。このような行動が two-frontal behavior とよばれ、彼等が攻撃的な場面において第三者の支援をひきだす、あるいは予期しつつ行動していることを示すものであると考えられている。どのような行動がこの two-frontal behavior の範疇に入るものとして考えられるのか、またそれがどのように個体の行動のレパートリーとして発達していくのかということをも明らかにする目的で調査を行った。

対象は京都府嵐山の群れ (嵐山 B 群) であり、適宜 1972-74 年に福井県高浜町音海の群れで得られた資料を参照しつつ分析を行った。

調査は今もって不十分であるが、概略以下のようことを示す結果が得られた。Two-frontal behavior はその行動をとる個体が、半ば攻撃的であり、また半ば防衛的である場合に表われるものであり、その時の社会的な場の違いによって、より攻撃的なもの (Pointing, Bark-scream 等) かより防衛的なもの (Scream, 前者と同じ Bark-scream 等) があらわれる。このような two-frontal behavior をとった個体は、より防衛的な場面において第三者の支援を頻繁に受けている。また音海の群れにおいては、このような行動は生後約 10 ヶ月を経た頃から目立って多くなっているが、それは前年の交尾期にアカンボウがはじめて数多く攻撃の対象となった時、Scream を発することによって、第三者の支援をうけたという経験をもとに、社会的に学習したといえるのではないかと思える。より攻撃的な形での Two-frontal behavior は Infant のころはむしろ頻度が少く、Juvenile の段階でより活発に行われているようである。

#### 野生ニホンザルにおける重度奇形個体の行動発達の研究

小山 高正 (阪大・人間科学)

中道 正之 (阪大・人間科学)

野生ニホンザルにおける先天的四肢奇形は全国的に発生しているが、まだ行動学的観点からの観察はなされていない。本研究は奇形出生率が異常に高く (約 25%)、かつ今までの調査から血縁関係に基づく集団成員間の基本的社会関係が明らかにされた淡路島集団で、奇形個体の身体的社会的発達過程を明らかにすることを目的として行われた。

予備観察において、合指、裂指等の軽度の奇形個体と正常個体の行動の間には大きな差異が認められなかったため、前肢が肘関節から欠損し、足首が歪曲した重度奇形個体 (1978 年、1979 年生れの雄各 1 頭) に焦点が定められた。尚、対照個体としては同年齢、同性の正常個体が同じ方法で観察された。

重度奇形個体の位置移動はその初期は肘と後肢での四足歩行であったが、生後 6 ヶ月頃から後肢による二足歩行に移行し、四肢の障害に最も適したパターンを獲得するに至った。しかし木や斜面等への登攀能力や行動の敏捷性は正常個体に比べて本質的に劣っていた。社会関係については、重度奇形個体は母ザルとの接触時間が正常個体に比べて長く、母ザルへの依存度が高い。集団成員との関わりでは、正常個体は遊び行動などの活動性の高い行動を介して未成年個体との関係を増していくが、奇形個体は四肢障害によりそのような行動を制限されるために、餌場では比較的動きの少ない成体に関わりを指向するのが認められた。

以上のように、運動能力が制限されるため同年齢正常個体と同様の社会関係を発展させることが難しい重度奇形個体は、正常個体とは異なる個体関係を持ち、結果的に集団内で特異な社会的地位を獲得していると思われる。

本研究は当該重度奇形個体が成長し、成体に達する過程まで継続して、特に、集団成員との社会的関わりの変容を明らかにしていく必要があると考えられる。